

一般質問

市長の政治姿勢に 「理念」「理想」は あるか



大澤祐治郎 議員

絶え間なく監視し臨機応変な対応をしていきたい。現状では、特例債の張り付けによってプライマリーバランスは単年度黒字だ。

質問 特例債事業の見直しは財政見通しの分析が甘かったからだ。その責任はどのようなのか。

市長 確かに国の地方税の大幅カットが予測できなかった甘さはある。

質問 拙速すぎる人事機構改革で、庁内の動揺は相当に

大きいと聞く。春に11室を増して、1年経たないうちに6部24課制を導入することは経費がかかり、住民に混乱を招き、サービスの低下にならないか。

市長 サービスをより専門的にするため、行政の流れを迅速にしていきたいので、拙速と言われるが、平成18年4月1日からこの機構改革に踏み切る。慣れるまで混乱はあ

るが、監視していく。

質問 高村薫の近著に「新リア王」があり、その中で80年代の政治家は、少なからず政治姿勢に「理念」と「理想」を持っていたと書かれていたが、今日の政治家はその理想、理想が薄れてきた。「列島改造論」を唱えた田中角栄もその政治姿勢を「土建屋政治」、「利権政治」などと批判されたが、角栄には「あるべき国家の姿」があった。都会の高

度成長期を目にして、地方との落差をどうしても埋めたいと思ひ、全ての国民が平等に発展の恩恵を受けるべきと言った。市長も佐渡市を目指す政治の中で「理念」と「理想」

があったはずだが、この2年間に市長の佐渡の将来に取り組む姿には理念、理想が薄らいでしまったようだ。質問の答弁は原稿の棒読みで、自らの政策スタンスには情熱も責任も感じられない。市長の政策音痴が際立つし、財政逼迫の中で佐渡市をどう導くのか。政治姿勢としての理念と理想を明白に示してもらいたい。

市長 確かに80年代の政治家には理念、理想を声高にうたう社会環境、時代背景があった。しかし、今日は国の財政環境の悪化から、地方財政は劣悪状態で、脱却に窮している。本市も少子高齢時代に

突入し、人口減による税の減収が極めて大きく対策に苦慮し、住民要望にも合併当初の3分の1も応えることができて困っている。私自身、決して意欲、情熱の後退はなく、理念、理想はしっかり持っている。財政難を克服して残り2年に強い意欲を持っている。**質問** 財政逼迫で特例債事業を変更しないと財政破綻するのではないか。

財政課長 新市建設計画等調査特別委員会では答弁したとおり、5か年間で100億円近く大幅な事業見直しをして、バランスを取り次いでいきたい。もちろん国の財政事情を

